

2. 事業の概要と成果	
(1) プロジェクト目標の達成度 (今期事業達成目標)	<p>ジェリコ県において、公立・私立学校、子ども支援センター、保護者、地域住民を含む学校内外における子ども支援が充実し、子どもの健全な社会的成長に寄与した。</p> <p>研修やハンドブックを通じて、教員、保護者の子どもが抱える課題への対応能力が向上した。</p>
(2) 事業内容	<p>1. 対応能力向上研修</p> <p>2年次下半期からの対象校である公立校5校と私立校3校の教員と子ども支援センター職員に対して、演劇・音楽・美術・心理ケアの研修を実施した。なお、申請時点では私立校4校を対象としていたが、1校は辞退の申し出があったため、私立校は3校を対象とした。研修の講師は、2年次と同じパレスチナの4団体から派遣した。10回の対面研修のうち、前半6回は、コミュニケーションや子どもの不安軽減、安心感の向上に特化したものとし、後半4回は、教員同士の知識・経験共有や、モニタリングを通してのフォローアップを目的とした復習要素を含む研修を行った。新型コロナウイルスの影響で移動制限等の規制があった時期はオンライン研修を実施し、それまでの研修の復習を行い、記憶定着を促した。事業終了時には、研修を終えた教員への研修修了書授与式も開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研修参加者数、実施回数</li> <li>[演劇] 教員7名、子ども支援センター職員2名</li> <li>[音楽] 教員10名、子ども支援センター職員1名</li> <li>[美術] 教員9名、子ども支援センター職員1名</li> <li>[心理ケア] カウンセラー5名、教員6名、子ども支援センター職員1名。なお、カウンセラー5名については、文書番号パN31第7号文書の通り、11月以降は本事業の研修には参加していない。</li> <li>・研修回数</li> <li>[演劇・音楽・美術研修]</li> <li>(上半期) 3時間×8回×3科目 (オンライン2回含む)</li> <li>(下半期) 3時間×4回×3科目 (フォローアップ研修)</li> <li>[心理ケア研修]</li> <li>(上半期) 3時間×8回 (オンライン2回含む)</li> <li>(下半期) 3時間×3回 (フォローアップ研修)</li> </ul> <p>2. ハンドブックの作成</p> <p>教員やセンター職員、および保護者が、日々の授業や活動、家庭で活用できるハンドブックを作成した。研修で扱った内容やモニタリング時の授業を参考に、演劇、音楽はチームワークやコミュニケーション方法を学べる内容を、美術は色の作り方や黒板とチョークの使い方などを、心理ケアでは子どもとの関わり方や子どもが発するサインの見つけ方などを学べる内容を盛り込んだ。作成にあたっては、今までに研修を担当した7団体と協力し、2年次に作成した試行版ハンドブックを使用した教員からの意見を反映させた。演劇と音楽は、講師が実際に子どもたちと活動を行っている様子がわかるビデオを、美術は講師が色を塗ったり文字を書いている様子がわかるビデオを作成し、ハンドブックと繋げる形で動画サイトYouTubeで公開、わかりやすく、すぐに使えるハンドブックを目指した。また、特に低学年の生徒が多い公立学校12校を教育省と一緒に選定し、ハンドブック活用方法を学べるワークショップを開催した。ワークショップでは、当団体職員による説明の後、教員同士でアイディアを出し合い、授業への活用方法を実践する場を設けた。ハンドブックは当初370冊の配布予定であったが、ジェリコ県外も含めて、学校や教育関連施設から配布してほ</p>

しいとの要望があり、合計 848 冊を印刷、ジェリコ県の公立・私立・UNRWA 校、作成に協力した 7 団体、各県の子ども支援センターや幼稚園、保護者向けワークショップに参加した保護者と子ども支援センターに通う子どもの保護者 142 名に配布した。

・ハンドブック活用のためのワークショップ実施校数、参加人数  
ジェリコ県公立学校 12 校、参加教員合計 193 名

### 3. 研修の学びとハンドブックを活かした授業、活動の実践

1. の研修を受けた教員、職員が研修の学びとハンドブックを活用し、授業やセンターでの活動を実施した。学校の授業では、アラビア語の派生形を学ぶ演劇ゲームや、教員がオリジナルのメロディを作り、詩に合わせて子どもたちが歌う、絵を描きながら英語のポストカードの書き方を学ぶなど、教員が研修やハンドブックで学んだことを発展させ、工夫を凝らした授業が確認できた。特に新型コロナウイルスの影響で、ストレスや不安を抱える生徒が増える中、学校やクラスが安心できる場となるよう、協調性やコミュニケーション方法を学ぶ、人前で発表する、人の意見を聞くなど、授業を通して社会性を育み、生徒が楽しみながらわかりやすく学ぶ授業が実施された。心理ケアについては、学習の遅れなどが見られる特別支援が必要な生徒へ、玩具や絵を使ったわかりやすい授業や、悩みやストレスを扱った授業が行われた。子ども支援センターでは、新型コロナウイルスの影響でセンターが閉館していた期間は、Facebook のページとグループにおいて、オンラインクイズ大会の実施、親子で楽しめる料理レシピの掲載、保護者向けに子どもと家で過ごす際の注意点などを連日投稿し、子どもや保護者との繋がりを維持した。センター再開後は、登録人数やグループ分けによる人数制限、マスク着用やアルコール消毒の徹底など感染対策を行い、演劇、音楽、美術、アクティビティ、心理ケアの対面での活動を行った。新型コロナウイルス感染拡大を受け、出張アクティビティは実施できなかったが、表現力やチームワークを学ぶための演劇やダンス発表会や、日本の中学校とのオンライン交流会なども実施した。

学校、センターでの授業・活動は、学校長、センター長による日常的なモニタリングと指導の他、研修を担当した講師と当団体職員によるモニタリングを実施、結果を共有したり、教員・職員側からの悩みや相談を受ける個別指導の時間も設けた。特に学校再開後は、生徒の学習の遅れやストレス、不安感が目立ち、教員自身がストレスやプレッシャーの中で働く状況となり、個別指導で直接アドバイスを聞いてよかったとの声が教員よりあった。

授業・活動に必要なボール、文房具、楽器、絵具などを対象公立学校 5 校と子ども支援センターに供与した。資機材はそれぞれ担当教員や職員が管理し、授業・活動の中で適切に使用されている。

ハンドブックを活用したアイデア発表会を事業終了時に教育省と開催した。ハンドブックに掲載されている活動を教員が 1 つ選び、実際の授業で使えるように発展させたアイデアを募ったもので、ジェリコ県の公立・私立学校教員が参加し、教育省と当団体で優秀賞 2 名を選出、表彰した。

・講師と当団体職員によるモニタリングの実施回数  
公立学校教員・子ども支援センター職員 1 名につき 4 回

### 4. 保護者向けワークショップの開催

子ども支援センターの心理ケア担当職員と当団体のカウンセラーの資格を持つ職員が講師となり、保護者向けワークショップを開催した。ワークショップは、女性組合からの要望を受け、難民キャンプやヨルダン溪谷の村でも開催し、年齢に合わせたコミュニケーション方法や

	<p>暴力に頼らない躰について学べる場を提供した。また、風船やビーズを使った自己紹介やゲームを取り入れ、保護者が楽しみながら学び、意見を発言しやすい場作りにも工夫した。新型コロナウイルスの影響で子どもと家で過ごす時間が増えた保護者にとっては、家庭の外に出て、同じ年代を持つ保護者と出会い、体験談や悩みを共有してアドバイスを送り合うなど、保護者同士が繋がる貴重な場となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者向けワークショップ開催数、参加人数</li> </ul> <p>18回（2時間×4回×3グループ、3時間×3回×2グループ）、計48名</p> <p>新型コロナウイルス感染対策のため、各グループの人数および回数を減らして実施した。</p>
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>1. 対応能力向上研修</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・直接裨益者</li> </ul> <p>8校の教員32名、子ども支援センター職員6名</p> <p>【結果】</p> <p>1-1-1. 研修に参加した教員の10割が、授業の実践に研修内容が役立ったと答えた。</p> <p>1-1-2. 研修に参加した教員・職員の9割が、研修内容が日々の子どもへの問題対応時に有効と答えた。アンケートでは、授業中、子どもの集中力が続かない時に使えるゲームや、生徒が興味を持つ教員の話し方を学べたといった意見があった。また、特にコロナ禍での学校再開以降、研修で学んだ生徒が楽しく学べる参加型の授業は、休みがちだった生徒が学校に来る動機づけに役立ったとの声も多く上がった。</p> <p>1-1-3. 学校長や教育局、研修を実施する講師からは、新しいアイデアを盛り込んだ授業が行われている、生徒参加型の授業で生徒の理解力に前向きな変化が見られた、子どもが直面している課題と学校・教員がとろうとしているアプローチを保護者に伝えるようになり、保護者からの不満が減った、生徒が教員を信頼している様子が伝わるなどのコメントを得、研修に参加した教員の授業・活動における対応能力の向上、前向きな変化を確認した。</p> <p>2. ハンドブックの作成</p> <p>【結果】</p> <p>2-1. 配布版ハンドブックが完成、848冊印刷・配布した。</p> <p>3. 研修の学びとハンドブックを活かした授業、活動の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・直接裨益者</li> </ul> <p>公立校5校の研修を受けた教員の授業を受けた生徒数1,185名 子ども支援センターに通う子ども188名（6～15歳、2021年7月末）</p> <p>【結果】</p> <p>3-1. 10割の教員が研修で学んだことを授業で実践できていた。</p> <p>3-2. 研修を受講した教員・職員、保護者の10割が、配布版ハンドブックを授業・活動・家庭で活用できると答えた。</p> <p>3-3-1. 授業・活動に参加した子どもに対するアンケートにおいて、子どもの日々の生活での不安感を示す項目について33%の子どもに肯定的な変化がみられた。</p> <p>子どもの不安感については、2020年初頭のイスラエル政府によるヨルダン溪谷の併合案発表、それに反対するデモの発生、新型コロナウイルスの影響による学校・教育施設の閉鎖、外出制限などの規制、2021年4～5月にかけての東エルサレム・西岸地区での対イスラエルデモとイスラエル政府による軍事活動、ガザ地区とイスラエル間でのミサイル攻撃と空爆など、子どもが不安を感じやすく、暴力的になる事案が相次いで起こり、子どもへのアンケートでは、不安感に対する</p>

	<p>肯定的な変化が十分にみられず、目標の50%に届かなかった。一方、教員や学校長からは、授業中の態度に落ち着きがみられるようになった、欠席率が減った、授業でストレスをリリースできるので以前より子どもたちが落ち着いたといった前向きな変化がみられたとの声があった。今後、教員や職員がハンドブックを使用しながら研修で学んだことを活用し続けることで、子どもの不安感が改善していくことを期待したい。</p> <p>3-3-2. 対象校の教員の10割が担任する子どもの落ち着きや暴力性について前向きな変化を確認した。授業中座り続けていることができなかった生徒が、楽器を使った授業で集中力が増して歩き回らなくなった、特別支援が必要な生徒が自分の意見をうまく表現できず、黙ってしまったり、時に暴力的になってしまうことがあったが、研修で学んだことを活かしてコミュニケーション方法を変えたところ、生徒が意見を言えるようになった、保護者とも連絡を取り合うことで子どもの問題行動を家庭と学校両方からアプローチすることができた、などの意見がアンケート、およびモニタリング時に確認できた。</p> <p>4. 保護者向けワークショップ</p> <p>【結果】</p> <p>4-1. ワークショップに参加した保護者の10割がワークショップの内容が自身の子どもへの対応に有効と答えた。子どもとの信頼関係の築き方を学べた、適切な躰方法を学んで自信がついた、子どもの成長に過度に関わるのではなく、子どもを尊重することを学んだなどのコメントがあった。</p>
(4) 持続発展性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業終了後も研修の学びとハンドブックを活かした授業案のアイデア発表会が教育省主催で1年に1回開催される予定であり、教員への動機づけおよび研修の学びの応用、発展、共有を後押しする。</li> <li>・ハンドブックは、ジェリコ県の学校のみならず、西岸各地の子ども支援センターや子ども向け活動を行う団体にも配布済みであり、子ども育成に関わる機関に対応ノウハウが蓄積された。</li> <li>・ジェリコ市広報課や市議員との協議の結果、当事業で雇用していた子ども支援センターの2名の職員は、ジェリコ市職員としての雇用が決定し、事業終了後も引き続きセンターにて活動しており、センターが地域における子ども支援活動の拠点として今後も機能していく。</li> <li>・学校・センターに供与した資機材は適切に管理され、事業終了後も授業・活動にて維持活用される予定である。</li> </ul>